

翻訳（羅和对訳）

## 「人間は何かを知りうるか」（2）

— ガンのヘンリクス 『定期討論のスンマ』 a.1, q.1 —

“*utrum contingat hominem aliquid scire*”

*Henrici de Gandavo Quaestiones ordinariae (Summa)*, a.1, q.1:

A Japanese translation with the Latin text, an introduction, and notes

加藤雅人  
KATO Masato

This is the second part of two parts series of a Japanese translation with the Latin text, an introduction, and notes of Henry of Ghent's *Quaestiones ordinariae (Summa)*, a.1, q.1. Henry's Latin text used here is from *Henrici de Gandavo Quaestiones ordinariae (Summa)*, art.1-5, ed. Gordon A. Wilson (Ancient and Medieval Philosophy. De Wulf-Mansion Centre. Series II: Henrici de Gandavo *Opera Omnia*, vol.21), Leuven: Leuven University Press, 2005, pp.3-28. I have received written permission to use it from the editor Prof. Gordon A. Wilson with the following words, "The Latin text is copyrighted and is published here with the permission of the editor, and with the knowledge and consent of the De Wulf-Mansion Center and Leuven University Press." I am much obliged to Prof. Wilson and those others concerned.

Henry of Ghent (Henricus de Gandavo/ Gandavensis; d. 1293) is a thinker active and most influential at Paris University during the last quarter of the 13<sup>th</sup> century between the age of Thomas Aquinas (d. 1274) and Duns Scotus (d. 1308). The first question (q.1), *utrum contingat hominem aliquid scire*, in the first article (a.1) on the possibility of human knowledge (*de possibilitate sciendi*) in Henry's *Summa*, considers whether it is possible for a human being to know something. This question is very important in the history of Western philosophy because it represents the moment when a medieval scholar took up a question raised by the ancient sceptics and attempted to defend the possibility of human knowledge. This occurred much earlier than Descartes who in the 17<sup>th</sup> century claimed to establish a solid basis of certain human knowledge against scepticism by means of what is called "*cogito, ergo sum*".

Key words

① medieval philosophy ② Henry of Ghent ③ Summa ④ knowledge ⑤ scepticism

①中世哲学 ②ガンのヘンリクス ③スンマ ④知識 ⑤懐疑主義

## 第1項第1問「人間は何かを知りうるか」——議論の構造

第1項第1問全体の議論の構造をまとめると、以下のような構成になっている。

<異論> 「人間は何も知りえない」

- 【1】 知り方の側から：ある知は、それよりよく知られた先行する知識によって獲得されるが、この系列を無限遡及することによって結局何も知られない。アリストテレス
- 【2】 知るための媒体の側から (1)：純正真理によってしか何かを知ることはできないが、その純正真理は身体感覚からは求められない。アウグスティヌス
- 【3】 知るための媒体の側から (2)：知性は感覚から来るものしか把握しないが、その感覚は多様な仕方で見られ確定的でない。デモクリトス、アカデメイア派、プロタゴラス。
- 【4】 知られる対象の側から (1)：知識は堅固で永続的なものについてしかないが、すべての認識の出発点となる可感的対象はたえず変化する。ヘラクレイトス
- 【5】 知る者の側から (1)：学ばない人は知識を持つことができないが、誰も何も学ばない。メノン。
- 【6】 知る者の側から (2)：学ばない人は知識を持つことができないが、誰も何も学ぶことができない。最初はタブラ・ラサ。
- 【7】 知られる対象の側から (2)：ものから受け取られた形象はもの自体ではなくその偶像であり、偶像の知覚はものの知覚ではない。e.g. ヘラクレスの画像。

<反対異論> 「人間は何かを知りうる」

- 【1】 知りたいという人間の欲求は無駄にはならないはずである。
- 【2】 人間が自然本性的に欲すること [この場合、知ること] はその人に起こりうる。
- 【3】 自然本性的に秩序づけられている自らの完全性 [この場合、知ること] は達成可能なはずである。
- 【4】 あらゆる運動 [この場合、知ること] には、その存在理由としての目的と到達点がある。
- 【5】 人間が何かを知りうることを疑う人は、自分が疑っていることを疑ってはならず、それを確信している。
- 【6】 知識があることを否定する人は、「知識がない」という知識を確信している。

<解答 (主文)> 「人間は何かを知ることができる」

- 【1】 (A) 広い意味で受け取られた知ること：他者の外からの証言によって (A1)、または自身の内からの証言によって (A2)。
- 【2】 (A1) 他者の外からの証言による知：e.g. 大海の存在、有名な土地や都市の存在、歴史上の人物や行為、我々の出自。
- 【3】 (A2) 自身の内からの証言による知：感覚的認識 (A2-1) であれ知的認識 (A2-2)

であれ、自分の内や自分の周りに経験する諸々のこと。

- 【4】 (A2-1) 固有対象についての感覚認識：感覚は、ものを真なる仕方で、あらゆる欺きや誤謬なしにあるがままに知覚する。e.g. 「それは白い」。
- 【5】 (A2-2) 固有の活動における知性認識：知性は、ものを真なる仕方で、あらゆる欺きや誤謬なしにあるがままに知覚する。e.g. 「それが人間なら、それは動物である」、「私が生きていることを私は知っている」
- 【6】 <7つの誤り→誤りの原因>
- (1) 対象の側から、すべてを偽とする人々（アナクサゴラスやクセノパネス）：知識は真なるもののみを対象とするが、すべてのものは有と非有の中間にあるため何も真とは判断されえず、従って知識はない。→可能態にある有と現実態にある有を区別しなかった
  - (2) 感覚の側から、すべてを偽とする人々（デモクリトスやレウキッポス）：可感的対象は感覚において多様性を示し、何も確実に知れられない。→知性と感覚は同じで、知識は感覚によって把握されると判断した。
  - (3) 感覚の側から、すべてを偽とする別の人々（アカデメイア派）：真理は曖昧で混雑し我々には隠されている。→真を偽から識別する明確な印は見出されえないと考えた。
  - (4) すべては同時に真かつ偽であるとする人々（プロタゴラス）：正反対の二つの感覚が同時に真である。→彼らは魂の外にもものが存在することを全面的に否定した。
  - (5) すべては同時に真かつ偽であるとする別の人々（ヘラクレイトス）：ものは絶えず変化し、ものの真理において留まらない。→可感的なもののみが有であるが、それらは自身のエッセにおいて確定せず、同じ観点において同時に有りかつ有らぬことになる。
  - (6) 『メノン』のアポリア（プラトン派）：誰も何も知ることはできない。→誰も何も学ぶことはできないと考えた。
- 【7】 懐疑論から帰結する3つの不都合の指摘（キケロ）：(1) 技術知から、(2) 徳の行為から、(3) 人間生活の営みから。

<異論解答> 「人間は何かを知ることができる」

- 【1】 異論の言う無限進行と不知は、それ自体によって第一に直接的に認識される自明の原理と、他によって知られる結論とを区別しない人々にしか当てはまらない。
- 【2】 異論の言うように純正真理は感覚の判断のみからは求められないが、感覚を起源として、正しく欺かれていない固有感覚の把握から確実な知を抽象する知性の判断において純正真理は求められるべきである。したがって、感覚を放棄する者や感覚の判断を全否定する者は、詭弁論によって欺かれている。
- 【3】 異論（デモクリトス、アカデメイア派、プロタゴラス）の言うように、感覚は多様に現われる。しかし、だからといって感覚を全否定すべきではない。なぜなら、欺かれて

いない感覚は全面的に信頼すべきだからであり、どの感覚が欺かれていないかは、知性  
が多くの経験によって判断できるからである。

- 【4】 異論（ヘラクレイトス派）の言うように、あらゆる自然的可感的事物はたえず変化す  
る。しかし、だからといって知識を全否定すべきではない。ピュタゴラスは自然的事物  
の原理や原因として不変的な数学的知識を措定し、プラトンは自然的事物から全面的に  
切り離されたイデア的形相を措定し、アリストテレスは自然的可感的可変的個体から知  
性が抽象する普遍すなわち類や種を措定し、アウグスティヌスはプラトンのイデアを神  
の中に存在する永遠で不変的な規則ないし理念と解釈し、想起と知的認識によるその  
分有を措定した。
- 【5 & 6】 異論の前提「誰も何も学べない」が偽である。学ぶことは、新知識の獲得の意味  
と結論の認識の意味と二通りに理解される。後者の場合、結論の現実的認識には、結  
論が可能的に潜在する諸原理の先行知が必要であるが、その第一諸原理の知には先  
行知はないから、前者の場合、すべての学ぶ者が先行知を持っている必要はない。
- 【7】 異論の言う偶像は、認識の対象としても、認識の観点としてもみられる。前者の場合、  
たとえば、壁に描かれたヘラクレスの像を本人と誤認識する場合、異論は真である。し  
かし、後者、すなわち偶像を可知的形象（認識の観点）とする場合、異論は偽である。後  
者の場合、知性は2段階で働く。知性は第一次的には、可感的事物の形象をそれが可感  
的である限りにおいて受け取るが、第二次的には、そのような形象の下で、自然的理性  
の探求によって非可感的事物（たとえば、実体の何性）の知を知性自身によって懐抱す  
る。「知性認識」（intelligere）は、いわば「内面を読むこと」（intus legere）である。

「人間は何かを知りうるか」(2) —ガンのヘンリクス『定期討論のスンマ』 a.1, q.1— (加藤)

## Henricus de Gandavo, *Quaestiones ordinariae (Summa)*, a.1, q.1<sup>1</sup>

(a second part of two parts series)

Contra hoc tamen antiquitus vigeant septem errores, tam ex parte sensus, tam ex parte intellectus, quorum quinque reprobant PHILOSOPHUS IV<sup>o</sup> Metaphysicae, illorum scilicet errorem qui negabant scientiam negando illud principium scientiale «*de quolibet affirmatio vel negatio, et non simul de eodem*». Sextum vero, qui erat MENONIS negantis hominem posse addiscere, reprobant in principio Posteriorum. Septimum autem, qui erat Academicorum negantium veri perceptionem, reprobant AUGUSTINUS et TULLIUS in libris suis De Academicis.

Eorum autem contra quorum errores disputat PHILOSOPHUS in IV<sup>o</sup> Metaphysicae, quidam dicebant quod omnia essent falsa, quidam vero quod omnia essent vera, alii vero quod omnia essent vera et falsa simul.

Eorum vero qui dicebant quod omnia essent falsa, quidam rationem opinionis suae acceperunt ex parte rei, ut ANAXAGORAS et XENOPHANES, qui dicebant quod «*omne esset admixtum cum omni*», quia videbant omne fieri ex omni, «*et illud mixtum dicebant esse neque ens neque non ens, et quasi neutrum extremorum, sed medium per abnegationem inter ipsa*», et ideo impossibile esse ut aliquid aestimetur vere, sed quod omnes aestimationes essent falsae, et quod sic non esset scientia de aliquo, quia scientia solum verorum est, ut dicitur I<sup>o</sup> Posteriorum.

Isti errabant non distinguendo ens in potentia ab ente in actu. «*In potentia enim contraria et contradictoria sunt simul, non autem in actu*». Circa entia enim in actu solummodo est distinctio contrariorum et contradictoriorum, quod scilicet aliquid sit determinate hoc et non illud, per quod est determinata veritas et scientia de aliquo, quod sit ipsum et non aliud.

Alii vero dicebant quod omnia essent falsa, sumentes rationem suam ex parte sensus, ut DEMOCRITUS et LEUCIPPUS, qui dixerunt quod «*idem sentitur a quibusdam quidem dulce et a quibusdam amarum*», et quod «*isti non differunt nisi secundum multitudinem et paucitatem, quia scilicet illi quibus videtur dulce sunt plures et sani, quibus vero amarum, sunt pauci et infirmi*». Nihil ergo, ut dicebant, est in rei veritate determinate tale vel tale, immo quodlibet nec tale est nec tale, et sic nihil est verum, sed omnia sunt falsa, et non est omnino scientia. «*Causa erroris istorum erat quia aestimabant quod intellectus et sensus idem essent et scientia a sensu comprehenderetur. Unde cum eis visum fuit quod sensibilia diversam habent dispositionem apud sensum nec aliquid certi sentiretur, crediderunt quod nec aliquid certe sciretur*».

Horum opinioni annexa fuit opinio ACADEMICORUM, de qua dicit AUGUSTINUS quod

## ガンのヘンリクス『定期討論のスンマ』a.1, q.1<sup>1)</sup>

(承前)

しかしながら、これに対して、古代では、感覚の側からも知性の側からも、7つの誤りが幅を利かせた。哲学者〔アリストテレス〕は、『形而上学』第IV巻<sup>47)</sup>において、このうちの5つを、すなわち《何であれあるものについて、肯定か否定のどちらかであって、同じものについて両方はない》という学知の原理<sup>48)</sup>を否定することによって知識を否定する人々の誤りを論駁した。他方、6番目の、人間が何かを学ぶことができることを否定した『メノン』の誤りを、彼は『分析論後書』冒頭<sup>49)</sup>で論駁した。しかし、7番目の、真なるものの知覚を否定するアカデメイア派の誤りは、アウグスティヌスやキケロが、アカデメイア派についての書において論駁した。

さて、哲学者〔アリストテレス〕は、『形而上学』第IV巻<sup>50)</sup>において誤りを論駁するが、その論敵たる人々のうち、ある人々はすべてが偽であると言い、別の人々はすべてが真であると言い、また別の人々はすべては同時に真かつ偽であると言う。

[1] すべてが偽であると言う人々のうち、ある人々は自らの意見の根拠がものの側からくると見なす。たとえば、アナクサゴラス<sup>51)</sup>やクセノパネスである。彼らが言うには、すべてのものがすべてのものから生成すると思われるので《すべてのものがすべてのものと混合し》<sup>52)</sup>、《その混合物は有でも非有でもなく、いわば両端のどちらでもなく、両端の否定から生じる中間である》<sup>53)</sup>。したがって、何も真とは判断されえず、すべての判断は偽であり、『分析論後書』第I巻<sup>54)</sup>に言われているように、知識は真なるもののみを対象とするので、いかなるものについても知識はない。

このような人々が誤ったのは、可能態にある有と現実態にある有とを区別しなかったことによる。《じっさい、可能態においては、正反対のものや矛盾するものが同時にあるが、現実態においては、同時にはない》<sup>55)</sup>。というのも、現実態にある有に関してあるのは、正反対のものや矛盾するものの区別〔片方〕だけだからである。すなわち、ものは確定的にこれであってあれではなく、したがって、それ自身であって他ではないある何かについて、確定的な真理と知識があるのである。

[2] これに対して、別の人々は、自らの根拠を感覚の側から取って、すべてが偽であると言った。たとえば、デモクリトスやレウキッポスである。彼らが言うには、《同じものが、人によっては甘いと感じられ、人によっては苦いと感じられる》が、《それらが違うのは、ただ量の多少に関してのみである。すなわち、甘いと思う人は健康な多数派であるのに対して、苦いと思う人は不健康な少数派だからである》。それゆえ、彼らが言うには、何も確定的にももの真理においてこれこれであるとはいえず、また何もこれこれでないともいえない。こうして、何も真ではなく、すべてが偽であり、知識はまったく存在しない<sup>56)</sup>。《このような人々の誤りの原因は、知性と感覚は同じで、知識は感覚によって把握されると判断したからである。それゆえ、可感的対象は感覚において多様な状態を示し、何も確実なものは感覚されないとされたので、何も確実には知られないと彼らは考えた》<sup>57)</sup>。

[3] 上述の意見と繋がっているのが、アカデメイア派の意見である。それについてアウグスティヌスは言う。《彼らの主張によれば、真なるものや確実なものは何も人間によって知覚され

«*affirmabant ab homine nihil veri aut certi percipi posse*», non tamen hominem debere cessare a veritatis inquisitione, *veritatem autem* dicebant aut *solum Deum nosse aut fortasse animam hominis* exutam corpore, et quod hoc intendebant de *rebus tantum quae pertinent ad philosophiam*, de aliis autem *non curabant*.

Ratio eorum, secundum quod recitat AUGUSTINUS, fuit quia dicebant «*solum his signis verum posse cognosci quae non possent habere rationem falsi*», ita quod verum a falso dissimilibus notis discerneretur nec haberet cum falso signa communia, et sic id quod verum est falsum apparere non posset; talia autem signa inverniri posse, impossibile esse credebant; et ideo concludebant quod veritas propter quasdam naturae tenebras vel non esset vel obruta et confusa nobis lateret. Unde et dixit DEMOCRITUS, ut habetur IV<sup>o</sup> Metaphysicae : «*aut nihil omnino est verum, aut quod non monstratur nobis*».

Alii autem, ut AMFRATHAGORAS et eius sequaces, dicebant *omnia* esse vera et falsa *simul*, dicendo quod «*non esset veritas extra animam*» et quod illud quod apparet extra non est aliquid quod est in ipsa re in tempore quo apparet, sed est in ipso apprehendente. Unde omnino negabant res habere esse extra animam, et ideo oportebat illos dicere quod duo contraria essent simul vera, non tantum secundum diversos apprehendentes secundum eundem sensum, sed etiam secundum eundem secundum diversos sensus et secundum eundem sensum diversimode dispositum, quia quod apparet uni mel secundum gustum, alteri apparet secundum gustum non mel, et quod «*uni apparet mel secundum visum, apparet eidem non mel secundum gustum, et quod alicui apparet per oculos unum, mutato situ oculorum apparet ei duo*». Ex quo concludebant quod nihil determinatum appareret nec esset aliquid verum determinatum, et quod ideo omnino non esset scientia.

Alii vero, ut HERACLITUS et sui sequaces, dixerunt quod omnia sunt simul vera et falsa, «*quia aestimabant quod tantum sensibilia essent entia* et quod ipsa *non essent determinata* in esse suo, sed continue transmutata, *et quod sic nihil* in eis maneret idem *in rei veritate*», sed essent in eis simul ens et non ens, et de eodem, quia motus componitur ex esse et non esse, et omnis transmutatio media est inter ens et non ens. Propter quod ulterius dixerunt quod «*non oporteret respondere ad quaestionem 'sic' aut 'non'*». Unde et «*Heraclitus in fine vitae suae opinabatur quod non oporteret aliquid dicere, sed tantum movebat digitum*». Ex quo movebantur ad dicendum quod de nullo scientia acquiri posset ab homine.

Opinio MENONIS et quorundam PLATONICORUM erat quod nemo posset aliquid addiscere et quod ideo nemo posset aliquid scire, ut supra dictum est in quinto et sexto argumento.

Defectus rationum istarum opinionum patebit statim in dissolvendo argumenta.

Sed contra positionem omnium eorum principalem, quia negans scientiam destruit omnem

えない》<sup>58)</sup>。けれども、人間は真理の探究を止めるべきではない。「しかし、神、あるいはおそらく身体から切り離された人間の魂のみが真理を知る」と彼らは言う<sup>59)</sup>。そして、彼らのこの言葉が言わんとするのは、哲学に関わる事柄についてのみであり、その他の事柄については彼らは関心をもたなかった<sup>60)</sup>。

彼らの根拠は、アウグスティヌスが言うところによると、《真なるものは、偽の側面を持つことがありえないような印によってのみ知られうる》<sup>61)</sup>と彼らが言ったことにある。したがって、真ははっきりとした印によって偽と識別され、偽と共通の印がいっさいなく、それゆえ真なるものが偽に見えることはありえない。しかし、そのような印が見出されることは不可能であると彼らは考えた。それゆえ、真理は、本性のある種の暗さのゆえに、存在しないか、あるいは曖昧で混雑したものとして我々には隠されているかのいずれかであると、彼らは結論した。こうして、『形而上学』第IV巻によれば、デモクリトスは《何ものも真なるものではない、あるいは〔真なる何ものも〕我々には示されない》<sup>62)</sup>と言った。

[4] しかし、別の人々、たとえばプロタゴラスとその弟子たちは、すべてのものは同時に真かつ偽であると主張し<sup>63)</sup>、《真理は魂の外にはなく》<sup>64)</sup>、外にあるように見えるのは、そう見える時、もの自体においてではなく把握する者においてある何かである、と言った。したがって、彼らは魂の外にものが存在することを全面的に否定し、その結果以下のように言わざるを得なくなった。同一の感覚に関して別々のものを把握している別々の人の場合だけでなく、別々の感覚に関して〔別々のものを把握している〕同一の人や、異なった状態にある同一の感覚に関して〔別々のものを把握している〕同一の人の場合も、それら正反対の二つが同時に真である、と。というのも、ある人にとって味覚に関して蜜に見えるものが、別の人にとっては、味覚に関して蜜には見えず、また《ある人にとって視覚に関して蜜に見えるものが、同一の人にとって味覚に関しては蜜には見えず、またある人にとって眼によって一つに見えるものが、眼の位置が変われば、同じ人にとって二つに見える》<sup>65)</sup>からである。以上のことから彼らが結論したのは、何も確定していないように見え、確定した真なるものは何もなく、そしてそれゆえに知識はまったく存在しない、ということであった。

[5] しかし、別の人々、たとえばヘラクレイトスとその弟子たちが言うには、すべてのこと〔述語〕は同時に真かつ偽である。《なぜなら、彼らの判断によれば、可感的なもののみが有であるが、可感的なものは自身のエッセにおいて確定せず、絶えず変化し、したがって、可感的なものの中には、ものの真理において留まるものは何もなく》<sup>66)</sup>、そのようなものにおいては、同じもの〔述語〕に関して同時に、有りかつ有らぬことになるだろうからである。なぜなら、運動は有と非有とから構成されており、あらゆる変化は有と非有との中間だからである。このため、彼らはさらに《問いに対して「然り」か「否」かの答えをすべきでない》<sup>67)</sup>と言った。したがって、《ヘラクレイトスも、人生の最後の時に、何も言うべきではないと考え、ただ指を動かしたただけだった》<sup>68)</sup>。こうして彼らは、いかなるものについても人間は知識を獲得できないと言うべきであると考えに到った。

[6] 『メノン』およびプラトン派のある人々の意見<sup>69)</sup>によると、上述の第5・第6異論で言われたように、誰も何も学ぶことはできず、それゆえ誰も何も知ることはできない。

これらの意見に根拠がないことは、異論解答において直ちに明らかとなるだろう。

しかし、哲学者〔アリストテレス〕が『形而上学』第IV巻<sup>70)</sup>で言うように、知識を否定す

fidem et totam philosophiam, ut dicit PHILOSOPHUS IV<sup>o</sup> Metaphysicae, impossibile est disputare demonstrando scientiam esse et aliquid posse sciri, quia negant omnia sciendi principia, sed tantum utendum est in defensione scientiae contra ipsos sermonibus veris et valde probabilibus quos non possunt negare. Ex talibus igitur sermonibus per tria aperta inconvenientia sequentia ex dicto ipsorum convincit eos TULLIUS in libro suo De Academicis, quorum primum sumitur ex scientiis artificialibus, secundum ex actibus virtutum, tertium ex operibus humanae conversationis.

Primum inducit sic. *«Ars omnis ex multis perceptionibus sit. Quas si substraxeris, quomodo distingues artificem ab inscio? Quid enim est quod arte effici potest, nisi is qui artem tractabit multa perceperit?»* Unde dicit AUGUSTINUS De vera religione: *«nihil aliud esse artem vulgarem nisi rerum expertarum memoriam»*.

Secundum inducit sic. *«Quaero: vir ille bonus qui statuit omnem cruciatum perferri potius quam officium perdat aut fidem, quomodo fieri potest ut nullum supplicium recuset, nisi his rebus assensus sit quae falsae esse non possunt?»*

Tertium inducit sic. *«Quomodo suscipere aliquam rem aut agere fideliter audebit cui certum nihil erit quid sequatur, ultimum bonorum ignorans quo omnia referantur?»* De hoc ponit bonum exemplum PHILOSOPHUS IV<sup>o</sup> Metaphysicae. Ambulans enim, ut dicit, *«ambulat et non stat, quia opinatur quod ambulandum est, et non vadit per viam ad puteum stantem in via, sed evitat ipsum. Scit enim quia casus in puteum est malus»*.

< AD ARGUMENTA >

Rationes igitur probantes quod contingit aliquid scire concedendae sunt. Ad rationes vero in oppositum respondendum per ordinem.

Ad primum, quod «omnis scientia est ex priori et notiori», etc., dicendum quod ille modus acquirendi scientiam intelligendus est solummodo de scientiis conclusionum. Principia enim per se primo et immediate cognoscuntur, non per alia, quia non habent alia notiora se. Non distinguuntur igitur notum per se ab illo quod est notum per aliud, illis solummodo contingit ille processus in infinitum et nihil scire, et non aliis.

Ad secundum, quod *«a sensibus corporis non est expetenda sincera veritas»*, dicendum quod verum est ubique et in omnibus sequendo iudicium sensus, et hoc propter duo ex quibus AUGUSTINUS arguit quod *«iudicium certum non est constitutum in sensibus»*, quorum primum est rerum sensibilibus mutabilitas, secundum est ipsius sensus fallibilitas. Apprehensione autem facta per sensus, avertendo a sensibus, ut iudicium fiat in ratione, quod summe monet fieri AUGUSTINUS in inquisitione veritatis, *«bene a sensibus sincera veritas*

る者はすべての信仰と哲学全体を破壊しているの、以上すべての意見の主要な論点に反駁して、知識があることそして何かを知ることが可能であることを示すことは不可能である。なぜなら、彼らは知ることのあらゆる原理を否定するからである。むしろ、彼らに反対して知識を擁護する時に用いるべきは、彼らがけっして否定できないような、究めて確かな真なる原理のみである。だからキケロは、『アカデメイア派』の中で、そのような原理に基づいて、彼らの言葉から帰結する三つの明らかな不都合によって彼らを論駁した。その第一は技術知から、第二は徳の行為から、第三は人間生活の営みから取られる。

キケロは、第一〔不都合〕を次のように導く。《あらゆる技術知は多くの知覚から来る。もし貴方がそのような知覚を取り除けば、如何にして貴方は技術知を有する者と無知なる者とを区別するのか？というのも、もし技術知を行使する者が多くのことを知覚していないとすれば、技術知によって生み出されうるような何があるのか？》<sup>71)</sup>そこからアウグスティヌスは、『真の宗教』において、《一般的技術知は経験されたものの記憶以外の何ものでもない》<sup>72)</sup>と言う。

キケロは、第二〔不都合〕を以下のように導く。《自らの義務や信仰を捨てるよりもむしろ、あらゆる拷問に耐えようと決心した善良な人間がいかなる罰も拒否しないことは、これらの偽ではありえないことに彼が賛同したのでないなら、如何にして可能であるのかと私は問う。》<sup>73)</sup>

キケロは、第三〔不都合〕を以下のように導く。《何が後に起こるかまったく定かでない人は、もしすべてのものが関係づけられている究極的な善について知らないなら、如何にして何かを企てたり信仰に従って行為しようとするのか》<sup>74)</sup>？哲学者〔アリストテレス〕は、『形而上学』第IV巻において、このことについての良い例を示している。じっさい、彼が言うには、散歩する者は、《散歩すべきであると考えから停まらないで歩き、また道路の中にある穴に向かって進まずそれを避ける。なぜなら、穴に落ちることは良くないことだと、彼は知っているからである》<sup>75)</sup>。

#### <異論解答>

したがって、何かを知りうることを立証する論〔反対異論1-6〕が承認されなければならない。しかし、それに反対する論〔異論1-7〕に対して、順番に答えなければならない。

第1〔異論解答〕—《すべての知識は先行しよりよく知られたものから来る》等々—に対して、次のように言わなければならない。そのような知識獲得の仕方は結論の知識に関するのみ理解されるべきである。というのも、原理には、他のよりよく知られたものはないので、〔原理は〕他によってではなく、それ自体によって第一に直接的に認識されるからである。それゆえ、それ自体によって知られるもの〔自明の知〕と他によって知られるもの〔結論の知〕を区別しない人々にしか、〔異論の言う〕無限進行と不知は当てはまらない。

第2〔異論解答〕—《純正真理は身体感覚からは求められるべきではない》こと—に対して、次のように言わなければならない。このことは、感覚の判断に従う場合、つねにあらゆるものにおいて真である。また、アウグスティヌスが《確実な判断は感覚においては構成されない》と論じる際の二つの理由によって、そのことは真なのである。その理由の第1は、可感的対象の可変性であり、理由の第2は、感覚それ自体の可謬性である。しかし、感覚を通じて把握がなされた後、感覚から転じて理性において判断を行うことによって（アウグスティヌスは真理の探究においてはそのような判断を行うことを非常に強く奨めている）、《正しく感覚か

*expetenda est*», et hoc quantum ex puris naturalibus iudicio rationis in lumine puro naturali potest conspici vel simpliciter iudicio intellectus in claritate lucis aeternae. De qua sinceritate in iudicio rationis sequentis sensum loquitur AUGUSTINUS ad litteram, secundum quod de utroque modo conspiciendi veritatem videbitur inferius. Ex sensu ergo originaliter bene est expetenda sincera veritas quodammodo, quoniam «sensus proprii est certissima cognitio *circa* suum *proprium obiectum*», nisi impediatur vel ex se vel ex medio vel ab aliquo alio, nec contingit cessante omni impedimento ipsum errare sive aliter apprehendere suum proprium obiectum quam sit, licet talis apprehensio non sit mansiva vel propter rei vel ipsius sensus mutabilitatem ut certa veritas diu capi non possit stando omnino in iudicio sensus. Id tamen quod apprehensum est per sensum non deceptum abstrahendo et iudicium formando penes intellectum, ubi manet quasi sine transmutatione quod apprehensum est nec verisimilibus speciebus phantasmatum obumbrari potest, certissima veritas a tali sensu capitur, et nobis certissima scientia est illa rerum sensibilibus quae ad sensus experientiam potest reduci. Unde sensum dimittentes et eius iudicium penitus abnegantes frequenter in absurdissimos errores apud intellectum sophisticis rationibus decepti inciderunt, sicut ZENO, qui dixit quod «nihil contingit moveri», et quicumque dixit quod «moto uno moventur omnia». Unde semper oportet credere sensui particulari non impedito, nisi alius sensus dignior in eodem alio tempore vel in alio eodem tempore contradicat vel virtus aliqua superior percipiens sensus impedimentum. Non enim sensus aequae bene dispositi sunt in omnibus vel in eodem diversis temporibus, et ideo non aequaliter iudicio eorum credendum est, ut patet in sano et aegro. Magis enim credendum est gustui sani quam aegri, et ei qui videt aliquid de prope quam qui videt a longe, et ei qui videt aliquid per medium uniforme quam ei qui videt per medium non uniforme, et sic de ceteris huiusmodi dispositionibus.

Ad tertium, quod idem saepius apparet diversimode eidem vel diversis, dicendum quod non sequitur ex hoc quod nulli sensui credendum est, quia, ut dictum est, in quo unus fallitur alter frequenter verum dicit, vel in quo idem fallitur in una dispositione verum dicit in alia. Et sic patet quomodo deficiebat ratio DEMOCRITI. Licet enim sensibilia habent diversam dispositionem apud sensum, aliquid tamen determinate percipitur per sensum non deceptum in hora in qua non decipitur. Et non solum differunt sensationes penes paucitatem et multitudinem sentientium, sed secundum dignitatem maiorem et minorem sensuum in sentiendo.

Similiter patet defectus rationis ACADEMICORUM. Non enim verum est dictum eorum quod nihil percipitur determinate per signa et quod non verificant de re, immo signa quae sunt propria sensibilia alicuius sensus, id quod sunt ostendunt sensui proprio non decepto nec impedito et in determinatam notitiam veritatis rei possunt intellectum inducere. Unde et

ら純正真理が求められるべきである》。そして、純正真理は、純粹に自然本性的な光の中にある理性の判断によって、純粹に自然本性的なものから限定的に、あるいは、永遠の光の明晰性の中にある知性の判断によって端的に、察知される。アウグスティヌスが語っているのは、文字通り、感覚に後続する理性の判断におけるそのような純正性についてである。真理を察知するこの二つの仕方については、後に見るだろう。それゆえ、純正真理は、ある意味において感覚を起源として、正しく感覚から求められるべきなのである。なぜなら、固有感覚それ自身によって、媒体によって、あるいはその他によって妨げられなければ、《固有対象についての固有感覚の認識は最も確実である》<sup>76)</sup>からであり、また、いかなる妨げもなければ、固有感覚が誤ることや、それが固有対象を実際とは別様に把握することはありえないからである。もっとも、そのような把握は、事物あるいは感覚そのものの可変性のゆえに持続的ではないので、感覚の判断にのみ立脚していると、確実な真理は長くは把捉されないのだが。しかし、欺かれていない感覚を通じて把握されたものを抽象し知性の下で判断を形成することによって、そのような感覚から最も確実な真理が把捉される。知性においては、把握されたものは、いわば不変的に持続し、真と見紛う表象像の形象によって曖昧化されることもありえないのである。そして、我々にとって最も確実な知識は、感覚経験へと還元される、可感的事物についてのそのような知識なのである。したがって、感覚を放棄する者や感覚の判断を全く否定する者は、詭弁論によって欺かれて、しばしば最も愚かな知性の誤りに陥る。たとえば、《何ものも動きえない》<sup>77)</sup>と言ったゼノンや、誰であれ《1つが動けばすべてが動く》<sup>78)</sup>と言った人々のように。したがって、ある特定の感覚が、それより上位の他の感覚（別々の時間における同一人物の場合であれ、同一の時間における別々の人物の場合であれ）と、あるいはその感覚が妨げられていると知覚する上位の力と矛盾しなければ、つねにその感覚を信用すべきである。というのも、諸感覚は、健康人と病人の場合で明らかなように、すべての人々において、あるいは同一の人物でも別々の時に、同じように良い状態にあるわけではないので、それら諸感覚の判断を同じように信頼すべきではないからである。じっさい、健康人の味覚は病人のそれより、あるものを近くで見る人は遠くから見る人より、あるものを一様な媒体を通じて見る人は多様な媒体を通じてみる人より、信頼すべきである。これと同様の他の諸々の場合についても然りである。

第3 [異論解答] — 《同じものがしばしば、同じ人あるいは別の人に、多様な仕方で現れる》こと — に対して、次のように言われるべきである。だからと言ってすべての感覚が信頼されるべきでないということにはならない。なぜなら、言われたように、ある感覚が欺かれる場合、しばしば別の感覚が真を語り、ある感覚がある状態で欺かれる場合、同じ感覚が別の状態で真を語るからである。こういうわけで、明らかにデモクリトスの論は破綻する。じっさい、可感的なものは感覚の下で様々な状態を持っているが、欺かれていない時には欺かれていない感覚によって何かが確定的に知覚されている<sup>79)</sup>。感覚作用が多様化するのには、感覚する者の数の多少によるだけでなく、感覚作用における諸感覚の威厳 [信頼性] の大小にもよる。

同様に、アカデメイア派の論の破綻も明らかである。というのも、印によって確定的に知覚されるものは何もなく、事物について真を表示する印はないという彼らの言説は真ではないからである。そうではなく、ある感覚に固有な可感的対象である印は、ありのままの姿を、欺かれず妨げのない固有感覚に対して表示し、知性をものの真理の確定的な知へと導くことができ

ipsimet solliciti erant in inquirendo veritatem per huiusmodi signa magis quam alii, licet aestimatio eorum erat quod veritatem numquam possent invenire. Et erat aestimatio eorum similis in hoc ei quod currere aliquem ad apprehendendum aliquid quod numquam apprehendet, sicut improperat eis PHILOSOPHUS IV<sup>o</sup> Metaphysicae . Cetera vero pertinentia ad eorum opinionem amplius declarabuntur in quaestione proxima sequenti.

Per idem patet falsum esse quod assumpsit AMFRATHAGORAS, quod res sequuntur sensuum apparentias, quoniam sensus, sive verus sive deceptus, non potest sumi nisi a re, quia «*sensus* est virtus *passiva*». Unde et quamvis idem diversimode apparet eidem vel diversis, hoc non est nisi propter deceptionem vel impedimentum alicuius sensus cui non oportet credere in hoc, nec tamen propter hoc dicendum est quod nulli sensui credendum est. Sensui enim non decepto omnino oportet credere et quis sit talis maxime habet iudicare intellectus ex pluribus experimentationibus praehabitis circa illa in quibus sensus potest decipi vel impediri.

Ad quartum, quod omnia sensibilia sunt in continua transmutatione, dicendum quod HERACLITIANI, quorum illa fuit ratio, «*solum sensibilia* credebant *esse entia*», et erat error omnium philosophantium usque ad tempora Italicorum, qui unanimiter negabant scientiam esse propter mutabilitatem rerum sensibilium naturalium. Quorum errorem percipientes posteriores philosophi ponebant scientiam esse et aliquid posse sciri in rebus sensibilibus naturalibus. Sed in modo sciendi et acquirendi scientiam diversificati sunt. PYTHAGORAS enim, primus Italicorum, credens cum praecedentibus quod de rebus naturalibus propter earum transmutationem ex eis ipsis non posset haberi scientia, ut tamen salvaret aliquo modo scientiam rerum naturalium, mathematica induxit in naturalibus, ponendo ipsa principia et causas rerum naturalium tam in esse quam in cognitione, eo quod per abstractionem suam a materia sensibili et transmutabili quodammodo sunt intransmutabilia. PLATO autem posterior PYTHAGORA, videns mathematica secundum rem inesse naturalibus et ideo realiter mutari cum naturalibus quantumcumque abstrahantur ab eis, nec per mathematica de naturalibus fixam posse haberi scientiam, posuit formas ideales causas et principia rerum naturalium tam in esse quam in cognitione, et omnino separatas ab eis et absque omni transmutatione, ut sic per illas de transmutabilibus intransmutabilis possit esse scientia.

ARISTOTELES autem, videns quod res nec habet esse nec cognosci nisi per id quod est in re, et quod singularium propter eorum transmutationem non posset esse scientia ex se ipsis, posuit universalia, genera scilicet et species, abstrahi per intellectum a singularibus in quibus habent esse secundum veritatem. Universale enim est unum in multis et de multis, quae, licet ut in singularibus sunt, sunt transmutabilia, ut tamen sunt in intellectu, sunt intransmutabilia. Et secundum hoc de rebus naturalibus, sensibilibus, particularibus, transmutabilibus per eorum

る。だから、彼ら[アカデメイア派]は、他の人々よりも、このような印によって真理を探究するのに熱心だった。ただし、彼らの評価では真理を見出すことは全くできなかった。この点で、彼らの評価は、『形而上学』第4巻<sup>80)</sup>で批判されているように、けっして把握することがないだろうものを把握するために人が走ることに似ている。彼らの意見に関連する他の事柄は、以下の諸問題でより詳しく明らかにされるだろう。

同じ理由で明らかに、プロタゴラスの想定(事物は諸感覚の現れに従う)も偽である。なぜなら、『感覚は受動的力である』<sup>81)</sup>ため、真であろうと欺かれていようと、感覚は事物からしか取られないからである。したがって、同じものが同じ人あるいは別々の人々にとって多様な仕方で見られる場合、これはある1つの感覚の欺きや妨げのみが原因であり、この点でそのような感覚は信頼すべきではない。しかし、だからといっていかなる感覚も信頼すべきでないと言うべきではない。なぜなら、欺かれていない感覚は全面的に信頼すべきだからであり、どの感覚がもっともそうである[欺かれていない]かは、感覚が欺かれたり妨げられたりする可能性について知性が前もって持っている多くの経験によって判断することができるからである。

第4[異論解答]—すべての可感的なものはたえず変化のなかにある—に対して、次のように言われるべきである。これはヘラクレイトス派の論であったが、彼らは《可感的なものだけが有である》<sup>82)</sup>と信じていた。そして、この論は、イタリア人の時代まで、すべての哲学者たちの誤りであった。彼らは、自然的可感的事物の可変性のゆえに知識の存在を否定した点で一致していた。後の哲学者たちは、彼らの誤りに気づき、知識はあり自然的可感的事物において何か知られようと主張した。しかし、知り方や知識獲得の仕方点では、彼らは様々であった。じっさい、イタリア人の最初の人ピュタゴラスは、先人たちと同様、自然的物事についての知識は、それらの変化のゆえに、事物そのものからは得られないと信じた。しかし、自然的物事の知識を何らかの仕方でも保護するために、エッセにおいても認識においても、数学的なものが自然的なものの原理や原因であると主張することによって、数学的なものを自然的なものの中に持ち込んだ。というのも、数学的なものは、可感的で可変的な質料からの抽象によって、何らかの仕方でも不変的なものだからである<sup>83)</sup>。これに対して、ピュタゴラスより後のプラトンは、数学的なものは自然的物事に実在的に内在し、それゆえ、それからどれだけ抽象されようとも、自然的物事と共に実在的に変化し、数学的なものによっては、自然的物事についての堅固な知識は得られないと考え、イデアの形相は、エッセにおいても認識においても自然的物事の原因や原理であり、それら[自然的物事]から全面的に切り離され、いかなる変化も免れ、したがって、それら[イデア的形相]によって可変的なものについて不変的な知識がありうると主張した<sup>84)</sup>。

これに対して、アリストテレスは、事物はその中にあるものを通してしかエッセを持ちえず認識されえないと考え、また個体についての知識は個体の可変性のゆえに個体そのものから得ることはできないと考え、普遍すなわち類や種は、個体(その中に[普遍が]真理にそくしてある)から知性によって抽象されると主張した。というのも、普遍とは、多において[ある]一、多について[述語される]一であり、それが個体においてある限りは可変的であるが、知性においてある限りは不変的だからである。このことから、自然的、可感的、個的、可変的諸物事について、知性のもとに存在する普遍によって堅固な知識が得られると彼[アリストテレ

universalia existentia apud intellectum posuit fixam haberi scientiam.

AUGUSTINUS autem *philosophia Platonis imbutus, si qua invenit in ea fidei accommoda, in scriptis suis assumpsit. Quae vero invenit fidei adversa, quantum potuit, in melius interpretatus est. Et ideo cum, ut dicit in libro 83 Quaestionum, q.° 44<sup>a</sup>, «sacrilegium videbatur esse opinari ideas rerum poni extra divinam mentem, quas ipsa intueretur ad constituendum quae constituebat», quod tamen ARISTOTELES PLATONI imposuit, dixit PLATONEM eas posuisse in divina intelligentia et ibi subsistere, secundum quod dicit VIII° De civitate Dei cap.° 4°: «Quid in his Plato senserit, id est, ubi finem omnium actionum, ubi causam omnium naturarum, ubi lumen omnium rationum esse cognoverit vel crediderit, temere affirmandum esse non arbitror. Fortassis enim qui prae ceteris Platonem fama celebriore laudant, aliquid tale de Deo sentiunt ut in illo inveniatur et causa subsistendi et ratio intelligendi et ordo vivendi». Unde AUGUSTINUS sanius interpretans dicta PLATONIS quam ARISTOTELES, ponit principia certae scientiae et cognitionis veritatis consistere in regulis sive rationibus aeternis incommutabilibus existentibus in Deo, quarum participatione per intellectualem cognitionem cognoscitur quidquid sinceræ veritatis in creaturis cognoscitur, ut, sicut sua entitate est causa omnium existendi in quantum sunt, sic et sua veritate est causa omnium cognoscendi in quantum vera sunt. Et per hoc de rebus transmutabilibus, quantumcumque transmutabiles sunt, certa potest esse et fixa scientia, secundum quod dicit AUGUSTINUS, XII° De Trinitate cap.° 14°: «Non solum rerum sensibilium in locis positarum sine spatiis localibus manent intelligibiles incorporalesque rationes, verum etiam motionum in temporibus transeuntium sine temporali transitu stant etiam ipsae intelligibiles non sensibiles rationes. Ad quas mentis acie pervenire paucorum est. At cum pervenitur quantum fieri potest, non in eis manet ipse perventor; et fit rei non transitoriae transitoria cogitatio. Quae tamen cogitatio transiens per disciplinas quibus eruditur animus memoriae commendatur; ut sit qua redire possit quae cogitur inde transire, quamvis si ad memoriam cogitatio non rediret atque ibi quod commendaverat inveniret, velut rudis ad hoc sicut ducta fuit duceretur; idque inveniret ubi primum invenerat in illa incorporea veritate, unde rursus quasi descriptum in memoria figeretur». Sed de hoc amplior sermo erit in quaestione proxima inferius.*

Ad quintum et ad sextum, quod non contingit scire, quia non contingit addiscere, dicendum quod assumptum falsum est. Bene enim contingit addiscere, ut patebit inferius. Sed intelligendum quod addiscere dupliciter potest accipi: uno modo communiter ad omnem acquisitionem scientiae de novo — sic non oportet quod omnis addiscens aliquid novit, quia addiscens notitiam primorum principiorum ex nulla notitia praecedente eam acquirit—; alio modo proprie

ス]は主張した。

これに対して、アウグスティヌスは、「プラトン派の哲学に浸り」、そこに「信仰と合致するものを見出すと」自らの文章に「取り入れた。しかし、信仰に反すると分かったものは」可能な限り「良いように」解釈した<sup>85)</sup>。それゆえ、『83 問題集』第 44 問でアウグスティヌスは言う。《事物のアイデアが神の精神の外に置かれ、そのアイデアを観て神は被造物を造ったと考えることは（これをアリストテレスはプラトンの説とみなした）<sup>86)</sup>、神への冒瀆であるように思われた》ので、アイデアは神の知解の中にありそこで自存しているとプラトンは考えた、彼 [アウグスティヌス] は言った。『神の国』第 8 巻において彼は言う。《しかしこれらにおいてプラトンが何を考えていたか、すなわち、あらゆる行為の目的がどこにあり、あらゆる自然本性の原因がどこにあり、あらゆる理性の光がどこにあると彼が認めかつ信じていたかを軽々に断言すべきではないと思われる。おそらく、プラトンを他の哲学者たちよりも高い名声によって賞讃している [プラトン派の] 人々は、神について次のようなことを考えているだろう。すなわち、神の中には自存の原因、知性認識の根拠、生の秩序が見出されると》<sup>87)</sup>。したがって、アウグスティヌスは、プラトンの言葉をアリストテレスよりも穏健に解釈し、確実な知識と真理認識の原理は、神の中に存在する永遠で不変的な規則ないし理念において成立すると考えた。知的認識によってそれ [規則ないし理念] を分有することによって、被造物において認識される何であれ純正真理は認識される。こうして、[神は] 自らの有性によって、有るものすべての存在の原因であるのと同様に、自らの真理によって、真であるものすべての認識の原因でもある。したがって、可変的な事物について、それがどれほど可変的であろうとも、確実に堅固な知識がありうる。アウグスティヌスは『三位一体論』第 12 巻で次のように言う。《だが、場所に置かれた可感的事物の可知的非物体的な理念が、場所的空間なしに存続するだけでなく、時間的移行の中にある運動の可知的非物体的な理念もまた、時間的移行なしに存立する。これら [理念] に心の目によって到達する人はほんの少数である。人々はなしうる限り達してもそこに留まらず、こうして、移り行かない事物についての移り行く思考だけが生じる。しかし、この移り行く思考は、精神を鍛える学問によって記憶に記念される。その結果、移り行かざるを得ない思考は戻ることのできる場所をもつことになる。もし思考がこの記憶に戻らず、記憶に記念されたものを見出さなければ、初学者のように最初に導かれた所に帰り、最初に見出した所すなわち非物体的な真理の中に、それを見出すだろう。そしてそれはまた、いわば書き込みとして記憶の中に固定される》<sup>88)</sup>。しかし、これについてのより詳細な言説は次の問題においてなされるだろう。

第 5 & 第 6 [異論解答] — 学ぶことができないので知ることができない — に対して、その前提が偽であると言わなければならない。というのも、後に明らかになるように、学ぶことは十分可能だからである。ただ、学ぶことは二通りに理解されうることが知られなければならない<sup>89)</sup>：一つは、一般的に新たな知識の獲得の意味で [理解される] — この意味では、すべての学ぶ者が何かを知っている必要はない。なぜなら、第一諸原理の知を学ぶ者は、その知をいかなる先行知から獲得するわけでもないからである — ；もう一つは、本来的に結論の認識のみの意味で [理解される]。後に明らかにされるだろうように、これ [結論の認識] を現実的に獲得するのは、それが可能的に潜在している諸原理の先行知からである。したがって、学ぶ者

ad cognitionem conclusionum solum, quam acquirit secundum actum ex notitia principiorum praecedente, in qua latet secundum potentiam, ut infra patebit; et sic addiscens aliquid novit.

Ad septimum, quod «homo nihil percipit de re cognoscibili nisi idolum solum», dicendum quod percipere idolum rei contingit dupliciter: uno modo tamquam obiectum cognitionis, — hoc modo verum est quod percipiens solum idolum rei non cognoscit rem, sicut videns imaginem Herculis depictam in pariete (ex hoc non videt neque cognoscit Herculem) —; alio modo tamquam rationem cognoscendi; sic non est verum. Per solam enim speciem perceptam de re cognoscitur vere res, ut lapis vere videtur per solam speciem suam sensibilem receptam in oculo, et vere intelligitur per solam speciem suam intelligibilem receptam in intellectu.

Sed dices forte quod illa species est sensibilis recepta a sensu, ergo cum sit accidens et similitudo solius accidentis, non inducit in cognitionem eius quod quid est et substantiae rei.

Ad quod dicendum quod, etsi intellectus recipit primo species intelligibiles rerum sensibilibum et corporearum, ut sunt sensibiles, quas primo per illas species intelligit, secundario tamen sub illis speciebus sensibilibum naturalis rationis investigatione concipit per se ipsam notitias rerum non sensibilibum, ut sunt quidditates substantiarum et alia eiusdem modi, quae proprias species non habent in intellectu. Et hoc est quod dicit AUGUSTINUS IX<sup>o</sup> De Trinitate cap.<sup>o</sup> 3<sup>o</sup>: «*Ipsam vim qua per oculos cernimus, sive sint radii, sive aliquid aliud, oculis cernere non valemus, sed mente quaerimus, et si fieri potest, etiam hoc mente comprehendimus. Mens ergo ipsa, sicut corporearum rerum notitias per sensus corporis colligit, sic incorporearum per se ipsam*». Et appellat res corporeas ut sensibiles sunt, res autem incorporeas quaecumque id quod sunt sensibilia non sunt, ut sunt mathematica et quidditates substantiarum, materia et forma et huiusmodi quorum notitiam mens sub speciebus sensibilibum ex naturali colligantia sensibilibum ad insensibilia naturalis rationis industria colligit quasi fodiendo sub ipsa specie a sensibili re ei praesentata, ad modum quo ovis naturali instinctu per species sensatas aestimat insensatas, ut imaginando vel videndo per speciem lupi sensibilem aestimat ipsum nocivum et inimicum, et ideo dicitur intelligere quasi ab «intus legere».

は何かを知っている。

第7 [異論解答] —《人間は認識されうる対象について偶像しか知覚しない》— に対して、ものの偶像を知覚するのは二通りあると、言わなければならない：一つは、認識の対象として— この場合、ものの偶像しか知覚しない人はものを認識しない、という主張は真である。たとえば、壁に描かれたヘラクレスの像を見る（したがって、ヘラクレス自身を見ておらず彼を認識していない）者のように—；もう一つは、認識の観点として；この場合、[その主張は] 真ではない。というのも、ものが真に認識されるのは、ものについて知覚された形象のみによるからである。ちょうど、石が真なる仕方で見られるのは、眼において受け取られたその可感的形象のみによってであり、[石が] 真なる仕方では知性認識されるのは、知性において受け取られたその可知的形象のみによってであるように。

しかし、おそらく貴方は言うだろう。その形象は感覚から受け取られた可感的なものであり、それゆえ、附帯性であってたんなる附帯性の類似にすぎないので、ものの何であるかや実体の認識には導かない、と。

これに対して、次のように言わなければならない。たとえ、知性は第一次的には、可感的物体的事物の可知的形象を、それが可感的である限りにおいて受け取り、それらの事物を最初そのような [受け取られた] 形象によって知性認識するとしても、[知性は] 第二次的に、可感的事物のそのような形象のもとで、自然的理性の探求によって非可感的事物（たとえば、実体の何性や、知性の中に固有の形象をもっていないその他同様のもの）の知を [知性] 自身によって懐抱する。まさにこのことを、アウグスティヌスは『三位一体論』第9巻において言う。《光線であれ他の何であれ、我々が眼で見分けるための力そのものを、眼によって見ることはできず、心で問い求め、もし可能ならそれを心で掴む。したがって、心そのものは、物体的事物の知を身体の諸感覚によって集めるように、非物体的な [事物の知を] 心そのものによって [集める]》<sup>90)</sup>。彼 [アウグスティヌス] は、可感的である限りにおいて、事物を物体的と呼び、何であれ非可感的な事物を非物体的と呼ぶ。たとえば、数学的なもの、実体の何性、質料と形相、および同様のものである。そのような [非可感的な] ものの知を、心は自然的理性の努力によって、可感的事物の形象のもとで、可感的なものとは非可感的なものとの自然的関係に基づいて集める。ちょうど羊が、自然的本能によって、感覚された形象によって、感覚されないものを判断するように、[心は] 可感的事物によって心に提示された形象のもとで、いわば掘り下げるといって [その知を集める]。たとえば、羊が、狼の可感的形象によって、想像し見ることによって、それ [狼] が有害で非友好的であると判断するように。それゆえ、知性認識 (intelligere) は、いわば「内面を読むこと」《intus legere》<sup>91)</sup> から来るかのように言われる。

訳注

- 1) *Henrici de Gandavo Quaestiones ordinariae (Summa)*, art.1-5, ed. Gordon A. Wilson (Ancient and Medieval Philosophy. De Wulf-Mansion Centre. Series II: *Henrici de Gandavo Opera Omnia*, vol.21), Leuven: Leuven University Press, 2005, pp.3-28. “The Latin text is copyrighted and is published here with the permission of the editor, and with the knowledge and consent of the De Wulf-Mansion Center and Leuven University Press.”
- 47) cf. Aristoteles, *Metaphysica*, IV, c.4-c.8, 1006a1-1012b31.
- 48) *Ibid.*, IV, c.3, 1005b18-25: ὅτι μὲν οὖν βεβαιωτάτη ἢ τοιαύτη πασῶν ἀρχή, δῆλον: τίς δ' ἔστιν αὕτη, μετὰ ταῦτα λέγωμεν. **τὸ γὰρ αὐτὸ ἅμα ὑπάρχειν τε καὶ μὴ ὑπάρχειν ἀδύνατον τῷ αὐτῷ καὶ κατὰ τὸ αὐτό** ...: αὕτη δὴ πασῶν ἐστὶ βεβαιωτάτη τῶν ἀρχῶν: ἔχει γὰρ τὸν εἰρημένον διορισμόν. ἀδύνατον γὰρ ὄντιον τὰυτὸν ὑπολαμβάνειν εἶναι καὶ μὴ εἶναι, καθάπερ τινὲς οἴονται λέγειν Ἡράκλειτον. 「さてそれゆえに、このような原理がなによりも最も確かなものであることは明らかである。では、それはどのような原理であるか、つぎにわれわれはそれを述べよう。それはすなわち、『同じもの〔同じ属性・述語〕が同時に、そしてまた同じ事情のもとで、同じもの〔同じ基体・主語〕に属し且つ属しないということは不可能である』という原理である…：だがとにかく、これがすべての原理のうちで最も確かな原理である。それは上述の特徴を具備しているからである。けだしなんびとも『同じものがあり且つあらぬ』と信じることは不可能であるから、たとえ或る人々はヘラクレイトスがそう言ったと思っているにしても」。『形而上学』出隆訳、1968、p.101。太字は筆者（以下、同）。
- 49) cf. Aristoteles, *Analytica Posteriora*, I, c.1, 71a25-b9: εἰ δὲ μὴ, **τὸ ἐν τῷ Μένωνι ἀπόρημα** συμβήσεται: **ἢ γὰρ οὐδὲν μαθήσεται ἢ ἂ οἶδεν**. οὐ γὰρ δὴ, ὡς γέ τινες ἐγχειροῦσι λύειν, λεκτέον. ...ἀλλ' οὐδὲν (οἶμαι) κωλύει, ὁ μανθάνει, ἔστιν ὡς ἐπίστασθαι, ἔστι δ' ὡς ἀγνωεῖν· ἄτοπον γὰρ οὐκ εἰ οἶδέ πως ὁ μανθάνει, ἀλλ' εἰ ὠδί, οἶον ἢ μανθάνει καὶ ὡς. 「さもなければ、『メノン』のあのアポリアが帰結するだろう。すなわち、ひとは何ごともしるべからずか、それとも、〔すでに〕彼が知っているものをしるべからずかのいずれかであることになるだろう。何となれば、このアポリアを解決しようと試みて或る人々が論ずるような仕方では論ずることは、疑いもなく許されないことだからである。…だが、ひとがこれからしるべからずのものについて、或る意味では知識をもっているが、或る意味では無知であるとしても、思うに、そこには何の妨げもない。何となれば、不合理があるとすれば、それは、ひとがこれからしるべからずのことを何等かの意味において知っているとするところにあるのではなく、それを或る特定の意味において、すなわち、それをこれからしるべからずの点において、また、これからしるべからずのままで知っているとするところにあるからである」。『分析論後書』加藤信朗訳、1971、pp.615-16。
- 50) cf. Aristoteles, *Metaphysica*, IV, c.4-c.8, 1006a1-1012b31.
- 51) cf. *ibid.* IV, c.4, 1007b25: καὶ γίνεταί δὴ τὸ τοῦ Ἀναξαγόρου, ὁμοῦ πάντα χρήματα: ὥστε μὴθὲν ἀληθῶς ὑπάρχειν. 「また実にここからアナクサゴラスのように『すべてのものは一緒であった』ということになり、こうしてなにももの真実には存在していないことになる」。『形而上学』出隆訳、1968、pp.109-110。
- 52) *Ibid.* IV, c.5, 1009a24-26: ἡ μὲν τοῦ ἅμα τὰς ἀντιφάσεις καὶ τάναντία ὑπάρχειν ὁρῶσιν ἐκ ταυτοῦ[25] γιγνώμενα τάναντία: εἰ οὖν μὴ ἐνδέχεται γίνεσθαι τὸ μὴ ὄν, προϋπῆρχεν ὁμοίως τὸ πρᾶγμα ἄμφω ὄν, **ὥσπερ καὶ Ἀναξαγόρας μεμίχθαι πᾶν ἐν παντί φησι** 「すなわちかれらは、(1) 相反する物事が同一のものから生成するのを見て、矛盾した物事や相反する物事が同時に同一のものに属しうると考えた。そこで、存在しないものが生成することはできないとすれば、相反する物事はどちらも生成する

より以前にすでに存在していたはずである、それはあたかもアナクサゴラスが『すべてはすべてに混じ合っていた』と言っているようにであろう」。『形而上学』出隆訳、1968、pp.115-6。

53) Averroes, *Comm. super Arist. Met.* IV, comm. 28 (Venetia, 1568, 98rF).

54) cf. Aristoteles, *Analytica Posteriora*, I, c.2, 71b9-72b4: ἀπόδειξιν δὲ λέγω συλλογισμὸν ἐπιστημονικόν· ἐπιστημονικὸν δὲ λέγω καθ' ὃν τῷ ἔχειν αὐτὸν ἐπιστάμεθα. εἰ τοίνυν ἐστὶ τὸ ἐπίστασθαι οἷον ἔθεμεν, **ἀνάγκη καὶ τὴν ἀποδεικτικὴν ἐπιστήμην ἐξ ἀληθῶν τ' εἶναι** καὶ πρώτων καὶ ἀμέσων καὶ γνωριμωτέρων καὶ προτέρων καὶ αἰτίων τοῦ συμπεράσματος· **...ἀληθῆ μὲν οὖν δεῖ εἶναι**, ὅτι οὐκ ἔστι τὸ μὴ ὄν ἐπίστασθαι, οἷον ὅτι ἡ διάμετρος σύμμετρος. 「われわれは今、ともかく論証による事物の知識があると主張する。論証とは知識的な推論をいう。『知識的な推論』と私が言うのは、その推論〔によって、結論〕を得ることにより、われわれが〔事物の〕知識をもつ推論のことである。そこで、『〔事物の〕知識をもつこと』がいまわれわれが定めたような事柄〔原因による、必然なる事態の把握〕であるとすれば、**論証的な知識が〔イ〕真の、〔ロ〕第一の、無中項の、〔ハ〕結論よりもいっそうよく知られえ、結論よりも先であり、結論の原因である原理から出発して得られるものであることもまた必然である。…〔イ〕原理は真にあるものでなければならない。なぜならば、あらぬものの知識をもつことはありえないからである。たとえば、〔正方形の〕対角線が一辺と通約しうることの知識をもつことがありえぬように。**」『分析論後書』加藤信朗訳、1971、p.616。

55) Aristoteles, *Metaphysica*, IV, c.5, 1009a34-35: καὶ ἅμα τὸ αὐτὸ εἶναι καὶ ὄν καὶ μὴ ὄν, ἀλλ' οὐ κατὰ ταῦτὸ ὄν: **δυνάμει μὲν γὰρ ἐνδέχεται ἅμα ταῦτὸ εἶναι τὰ ἐναντία, ἐντελεχείᾳ δ' οὐ**. 「したがって同じものが同時に存在した存在しないということもありうるからである。——ただしこのことは同じ意味においてありうるというのではない。というのは、可能性においては同じものが同時に相反する二つのもののどちらでもあるが、完全現実態においてはそうではないからである」。『形而上学』出隆訳、1968、p.116。

56) Aristoteles, *Metaphysica*, IV, c.5, 1009b1-5 & b12: ὁμοίως δὲ καὶ ἡ περὶ τὰ φαινόμενα ἀλήθεια ἐνίοις ἐκ τῶν αἰσθητῶν ἐλήλυθεν. τὸ μὲν γὰρ ἀληθὲς οὐ πλήθει κρίνεσθαι οἶονται προσήκειν οὐδὲ ὀλιγότηι, **τὸ δ' αὐτὸ τοῖς μὲν γλυκὺ γευομένοις δοκεῖν εἶναι τοῖς δὲ πικρόν**, ὥστ' εἰ πάντες ἕκαμνον ἢ πάντες παρεφρόνουν, δύο δ' ἢ τρεῖς ὑγίαινον ἢ νοῦν εἶχον, δοκεῖν ἂν τούτους κάμνειν καὶ παραφρονεῖν τοὺς δ' ἄλλους οὐ: 「同様にまた、或る人々は、(2) 現われ〔現象〕に真理ありとの見解をも、感覚的事物〔の観察〕から導出している。すなわち、(a) かれらの考えによると、物事の真理が否かはそれを認める者の多いか少ないかで決定さるべきではなく、そして、**同じものでもこれを味わう或る人には甘く思われ、他の或る人には辛く思われるので、もしすべての人が病気でありまたは狂気であって、健康でありまたは理性的であるのは二人か三人かであったとすれば、この二人か三人かが病気であり狂気であって他はすべてそうではないと思われるであろう、というのである。**」『形而上学』出隆訳、1968、pp.116-7。

57) *Ibid.*, 1009b14-15: ὅλως δὲ **διὰ τὸ ὑπολαμβάνειν φρόνησιν μὲν τὴν αἴσθησιν, ταύτην δ' εἶναι ἀλλοίωσιν, τὸ φαινόμενον κατὰ τὴν αἴσθησιν ἐξ ἀνάγκης ἀληθὲς εἶναι φασιν**: ἐκ τούτων γὰρ καὶ Ἐμπεδοκλῆς καὶ Δημόκριτος καὶ τῶν ἄλλων ὡς ἔπος εἰπεῖν ἕκαστος τοιαύταις δόξαις γενένηνται ἔνοχοι. 「また一般に、(c) かれらは思慮を感覚であると解し、そして感覚をば〔物体の〕変化であると解しているがために、感覚における現われを必然的に真実であると言わざるをえない。けだし、エムペドクレスやデモクリトスやその他ほとんどすべての人々がこの種の見解のとりことなったのも、こうした理由によるものである」。『形而上学』出隆訳、1968、p.117。

58) Augustinus, *Contra Academicos*, I, c.3, n.7. CCLSC 29, p.7, 19-27: Et Licentius: **Quis ignorat eum**

**affirmasse uehementer nihil ab homine percipi posse nihilque remanere sapienti nisi diligentissimam inquisitionem ueritatis**, propterea quia, si incertis rebus esset assensus, etiamsi fortasse uerae forent, liberari ab errore non posset quae maxima est culpa sapientis? Quam ob rem si et sapientem necessario beatum esse credendum est et ueritatis sola inquisitio perfectum sapientiae munus est, quid dubitamus existimare beatam vitam, etiam per se ipsa investigatione ueritatis posse contingere? 「リケンティウスは、『キケロが』と答えた、『次のように強く主張していることをだれが知らないでしょうか。すなわち、いかなるものも人間によって認知されえない。知者に残されていることは真理の熱烈な追求以外には何も無い。というのは、知者が不確実なものに同意するならば、たとえそれが真理であろうとも、知者は誤謬から解放されえないからである。誤謬は知者にとって最大の咎なのである、と。そういうわけで、知者は必然的に至福であると考えられなければなりませんし、また、真理の追求のみが知者の全き任務であるとしますと、真理の追求それだけで至福な生をもたらすと考えることを、どうしてわたしたちは疑うのでしょうか。』、『アカデミア派駁論』清水正照訳、1979、p.22。太字部分がヘンリクス引用箇所 CCSL 29, p.7, 19-21 である (以下、同)。

また、アウグスティヌスからの引用箇所の特定について平野和歌子さん(京大大学院文学研究科博士課程)のお世話になった。ここに記して感謝する。

- 59) *Ibid.*, n.9. CCSL 29, p.8, 68-70: **Veritatem autem illam solum Deum nosse arbitror aut forte hominis animam, cum hoc corpus**, hoc est tenebrosus carcerem, **dereliquerit**. 「しかし、神のみが、あるいは、暗い牢獄であるこの身体を棄てた人間の魂のみが、あの真理を知るのだとわたしは思います」。『アカデミア派駁論』清水正照訳、1979、p.25。
- 60) *Ibid.*, II, c.5, n.11. CCSL 29, p.24, 2-9: Nam et Academicis placuit **nec homini scientiam posse contingere earum duntaxat rerum, quae ad philosophiam pertinent** — nam caetera curare **se Carneades negabat** 「アカデミア派の人々の主張は次の二点から成る。一つは、哲学に属する事柄に関する限り、その知識に到達することは人間には不可能であるというのだ。たとえば、カルネアデスは哲学以外のことに関心をもつことを否定した」。『アカデミア派駁論』清水正照訳、1979、p.61。
- 61) *Ibid.* CCSL 29, p.24, 14-16: Quod breuius planiusque sic dicitur, **his signis uerum posse comprehendendi, quae signa non potest habere quod falsum est**. 「簡単明瞭に言えば、虚偽のしるしのないようなしるしによって把握されうというのだ」。『アカデミア派駁論』清水正照訳、1979、p.61。
- 62) Aristoteles, *Metaphysica*, IV, c.5, 1009b12: διὸ Δημόκριτος γέ φησιν ἤτοι οὐθὲν εἶναι ἀληθές ἢ ἡμῖν γ' ἄδηλον. 「だからこそ、デモクリトスも、なにものも真実ではないかあるいはすくなくもわれわれには不明である、と言っている」。『形而上学』出隆訳、1968、p.117。
- 63) *Ibid.*, IV, c.4, 1007b21-23: ἔσται γὰρ τὸ αὐτὸ καὶ τριήρης καὶ τοῖχος καὶ ἄνθρωπος, εἰ κατὰ παντός τι ἢ καταφῆσαι ἢ ἀποφῆσαι ἐνδέχεται, καθάπερ ἀνάγκη τοῖς τὸν Πρωταγόρου λέγουσι λόγον. 「なぜなら、もしすべてについてなにを肯定することも否定することも可能であるとすれば、同じ一つのものが船でもあり壁でもあり人間でもありうることになるからである。これはあたかもプロタゴラスの説を唱える人々において必然的にそうであったとおりでである」。『形而上学』出隆訳、1968、p.109。
- 64) Averroes, *Comm. super Arist. Met.* IV, comm. 21 (Venetia, 1568, 89rE).
- 65) *Ibid.*, IV, comm. 26 (Venetia, 1568, 94vI).
- 66) Aristoteles, *Metaphysica*, IV, c.5, 1010a1-10: αἴτιον δὲ τῆς δόξης τούτοις ὅτι περὶ τῶν ὄντων μὲν τὴν ἀλήθειαν ἐσκόπουν, τὰ δ' ὄντα ὑπέλαβον εἶναι τὰ αἰσθητὰ μόνον: ἐν δὲ τούτοις πολλὴ ἢ τοῦ ἀορίστου φύσις ἐνυπάρχει... ἔτι δὲ πᾶσαν ὀρῶντες ταύτην κινουμένην τὴν φύσιν, κατὰ δὲ τοῦ μεταβάλλοντος οὐθὲν ἀληθεύομενον, περὶ γε τὸ πάντη πάντως μεταβάλλον οὐκ ἐνδέχεσθαι

**ἀληθεύειν**. 「しかし、このような意見がかれらに生じた理由は、かれらが諸存在についてその真理を探究するにあたって、存在と言えただ感覚的な存在のみであると思っていたからであり、この感覚的な存在には無規定なものという本性がある …からである。…なおまた、この自然の全体が運動し変化しているのを見、しかもこのように転化する物事に関してはなんらかの真実をも語りえないものと考えて、かれらは、あらゆるところであらゆる仕方転化するこのような物事については真実を語ることはできないと判断した」。『形而上学』出隆訳、1968、pp.118-119。

67) Averroes, *Comm. super Arist. Met.* IV, comm. 22 (Venetia, 1568, 90vH).

68) Aristoteles, *Metaphysica*, IV, c.5, 1010a10-15: ἐκ γὰρ ταύτης τῆς ὑπολήψεως ἐξήθησεν ἡ ἀκροτάτη δόξα τῶν εἰρημένων, ἢ τῶν φασκόντων ἠρακλειπίζειν καὶ οἷαν Κρατύλος εἶχεν, ὃς τὸ τελευταῖον οὐθέν ᾧετο δεῖν λέγειν ἀλλὰ τὸν δάκτυλον ἐκίνει μόνον, καὶ Ἡρακλείῳ ἐπετίμα εἰπόντι ὅτι δις τῷ αὐτῷ ποταμῷ οὐκ ἔστιν ἐμβῆναι: αὐτὸς γὰρ ᾧετο οὐδ' ἄπαξ. 「そしてこの判断から、これまで述べてきたうちの最も極端な意見も現われたのである。それはヘラクレイトスの徒をもって自任する人々の意見、ことにクラテュロスのいっていたそれで、この人に至っては、ついになにごとも語るべきではないと考えられ、わずかに指頭を動かさしめるのみであった。そしてかれは、ヘラクレイトスが二度と同じ川に足を踏み入れることはできないと言ったのを遺憾とした。というのは、かれ自らは一度もできないと思ったからである」。

69) Aristoteles, *Analytica Posteriora*, I, 1, 71a29-30: εἰ δὲ μή, τὸ ἐν τῷ Μένωνι ἀπόρημα συμβήσεται· ἢ γὰρ οὐδὲν μαθήσεται ἢ ἃ οἶδεν. 「さもなければ、『メノン』のあのアポリアが帰結するだろう。すなわち、ひとは何ごとも学び知ることがないか、それとも、[すでに] 彼が知っているものを学び知ることのいずれかであることになるだろう」。『分析論後書』加藤信朗訳、1971、p.615。

70) cf. Aristoteles, *Metaphysica*, IV, c.4, 1006a1-12: ἡμεῖς δὲ νῦν εἰλήφαμεν ὡς ἀδυνάτου ὄντος ἅμα εἶναι καὶ μὴ εἶναι, καὶ διὰ τοῦτου ἐδείξαμεν ὅτι βεβαιοτάτη αὕτη τῶν ἀρχῶν πασῶν. ἀξιούσι δὲ καὶ τοῦτο ἀποδεικνύειν τινὲς δι' ἀπαιδευσίαν: ἔστι γὰρ ἀπαιδευσία τὸ μὴ γινώσκειν τίνων δεῖ ζητεῖν ἀπόδειξιν καὶ τίνων οὐ δεῖ: ὅλως μὲν γὰρ ἀπάντων ἀδύνατον ἀπόδειξιν εἶναι (εἰς ἅπειρον γὰρ ἂν βαδίζοι, ὥστε μηδ' οὕτως εἶναι ἀπόδειξιν), εἰ δὲ τίνων μὴ δεῖ ζητεῖν ἀπόδειξιν, τίνα ἀξιούσιν εἶναι μᾶλλον τοιαύτην ἀρχὴν οὐκ ἂν ἔχοιεν εἰπεῖν. 「しかしわれわれはいま、なにもも同時にあり且つあらぬことは不可能であるということ語り、またそれによってこれがあらゆる原理のうちで最も確かな原理であることを証示した。ところで、或る人々はこの原理〔矛盾率〕についてまでも論証を要求するが、これはかれらが教養を欠いているがためである。というのは、なにについては論証を求めべきであるが他のなにについては求むべきでないという区別を心得ていないのは、教養のない証拠だからである。なぜなら、なにごとについても一様に論証がありうるというわけではないからである(けだし論証の論証をと無限に追いつめて、しかも結局なんらの論証もえられないことになろうから)。しかし、もし或るなにについては論証を求めべきでないとするれば、あの人々は、その求めているようないっそう多く明確な原理として、まさにこの原理より以外に、どのような原理をあげようか」。『形而上学』出隆訳、1968、p.102。

71) Cicero, *Lucullus*, II, c.7, n.22.

72) Augustinus, *De vera religione*, c.30, n.54. CCSL 32, pp.222, 25-223,29: **Ita reperitur nihil esse aliud artem uulgarem, nisi rerum expertarum placitarumque memoriam** usu quodam corporis atque operationis adiuncto, quo si careas, iudicare de operibus possis quod multo est excellentius, quamvis operari artificiosa non possis. 「そこで、普通一般的意味での術というものは、身体と身体の働きとに結合したある種のものを使用することによって、われわれが経験し快く思うものの記憶以外

のなにもものでもないということ、発見するのである。もしあなたが、その術を欠いているとしても、その作品について判断を下すことはできるであろう。そしてその判断を下すことができるということは、たとえあなたが精巧な作品を創作することはできないとしても、たいへんすぐれたことなのである。『真の宗教』茂泉昭男訳、1979、p.399。

73) Cicero, *Lucullus*, II, c.8, n.23.

74) *Ibid.*, II, c.8, n.24.

75) Aristoteles, *Metaphysica*, IV, c.4, 1008b14-18: **διὰ τί γὰρ βαδίζει Μέγαροδε ἀλλ' οὐχ ἡσυχάζει, οἰόμενος βαδίζειν δεῖν; οὐδ' εὐθέως ἔωθεν πορεύεται εἰς φρέαρ ἢ εἰς φάραγγα, ἐὰν τύχη, ἀλλὰ φαίνεται εὐλαβούμενος, ὡς οὐχ ὁμοίως οἰόμενος μὴ ἀγαθὸν εἶναι τὸ ἐμπεσεῖν καὶ ἀγαθόν; δῆλον ἄρα ὅτι τὸ μὲν βέλτιον ὑπολαμβάνει τὸ δ' οὐ βέλτιον.** 「というのは、たとえば、誰かがメガラに行くには歩かねばならないと考えるとき、なにゆえかれはそこに歩いて行って、家に止まてはいないのであろうか。あるいは誰かが朝早く、たまたま泉水のきわまたは崖のふちに来合わせたとき、なにゆえにかれはそこに飛びこまなで、気をつけて避けるのか。それは、そこに落ちこむことを良くないことでもあり良いことでもあると無差別に考えているからではないであろう。そうだとすれば、明らかにかれは、一方は良くて他方は良くないと判断しているのである。『形而上学』出隆訳、1968、p.113。

76) Aristoteles, *De anima*, II, c.6, 418a14-15: λέγω δ' ἴδιον μὲν ὃ μὴ ἐνδέχεται ἕτερον αἰσθήσει αἰσθάνεσθαι, καὶ περὶ ὃ μὴ ἐνδέχεται ἀπατηθῆναι, οἷον ὄψιν χρώματος καὶ ἀκοὴν ψόφου καὶ γεύσιν χυμοῦ, ἢ δ' ἀφή πλείους [μὲν] ἔχει διαφορὰς, ἀλλ' ἐκάστη γε κρίνει περὶ τούτων, καὶ οὐκ ἀπατάται ὅτι χρῶμα οὐδ' ὅτι ψόφος, ἀλλὰ τί τὸ κεκρωσμένον ἢ ποῦ, ἢ τί τὸ ψοφοῦν ἢ ποῦ. 「私がそれぞれの感覚に『固有のもの』と言うのは、他の感覚によっては感覚することが不可能であり、またそれについて誤ることも不可能であるものである。たとえば、視覚が色を、聴覚が音を、味覚が味を対象とする場合がそれに当たる。ただし触覚の場合は対象となるものには異なる複数の種類がある。しかし少なくともそれぞれの感覚は、これら固有の対象について判別し、色ということ、音ということに関するかぎりでは誤ることはないであり、それらが誤るのは、色づけられたものが何であるか、あるいはどこにあるのか、音を発するものが何であるか、あるいはどこにあるのかということについてである。『魂について』中畑正志訳、2001、p.91。

77) cf. Aristoteles, *Metaphysica*, III, c.4, 1001b8-11: ἔπι εἰ ἀδιαιρέτον αὐτὸ τὸ ἓν, κατὰ μὲν τὸ Ζήνωνος ἀξίωμα οὐθὲν ἂν εἶη (ὃ γὰρ μήτε προστιθέμενον μήτε ἀφαιρούμενον ποιεῖ μείζον μῆδ' ἔλαττον, οὐ φησιν εἶναι τοῦτο τῶν ὄντων, 「さらに、(2) もし一それ自らが不可分割的なものであるならば、ゼノンの要請によると、それは全く存在しないことになる。なぜなら、それがなにもものかに加えられても減ぜられてもそのものを大きくも小さくもしないところのそれ、それをゼノンはなんらの存在するものでもないと言っているからである。『形而上学』出隆訳、1968、p.84。

78) cf. Aristoteles, *Physica*, VIII, c.1, 250b18-29: καὶ φθορὰς εἶναι τὴν θεωρίαν πᾶσαν αὐτοῖς, ἣν ἀδύνατον ὑπάρχειν μὴ κινήσεως οὐσης· ἀλλ' ὅσοι μὲν ἀπείρους τε κόσμους εἶναι φασιν, καὶ τοὺς μὲν γίνεσθαι τοὺς δὲ φθειρεσθαι τῶν κόσμων, αἰεὶ φασιν εἶναι κίνησιν (ἀναγκαῖον γὰρ τὰς γενέσεις καὶ τὰς φθορὰς εἶναι μετὰ κινήσεως αὐτῶν)· ὅσοι δ' ἓνα <ἢ αἰ> ἢ μὴ αἰεὶ, καὶ περὶ τῆς κινήσεως ὑποτίθενται κατὰ λόγον. εἰ δὲ ἐνδέχεται ποτε μηδὲν κινεῖσθαι, διχῶς ἀνάγκη τοῦτο συμβαίνει· ἢ γὰρ ὡς Ἀναξαγόρας λέγει (φησὶν γὰρ ἐκεῖνος, ὁμοῦ πάντων ὄντων καὶ ἡρεμούντων τὸν ἄπειρον χρόνον, κίνησιν ἐμποιῆσαι τὸν νοῦν καὶ διακρίναι), ἢ ὡς Ἐμπεδοκλῆς ἐν μέρει κινεῖσθαι καὶ πάλιν ἡρεμεῖν, κινεῖσθαι μὲν ὅταν ἡ φιλία ἐκ πολλῶν ποιῆ τὸ ἐν ἢ τὸ νεῖκος πολλὰ ἐξ ἐνός, ἡρεμεῖν δ' ἐν τοῖς μεταξύ χρόνοις, 「さて、運動が存在するということについては、自然についてなにごとかを論じている人々はみなこれを主張している。なぜなら、

かれらはみな、世界を創成させており、生成と消滅とについて研究をおこなっているのであるが、もし運動がなければ、生成と消滅のおこることは不可能だからである。だが、〔運動が常にあるかどうかについては意見が分かれており〕一方、世界は無数にあるとし、或る世界は生成の過程にあるが他の世界は消滅の過程にあると説く人々は、運動は常にある、と主張している。というのは、それらの世界の生成と消滅は、かならず、運動があつてはじめておこることだからである。他方、世界をただ一つであると説く人々は、かれらがその世界を常にあるとみるか常にはあらぬとみるかに照応して、運動についても、常にあると想定するか、常にはあらぬと想定するか、どちらかに分かれている。そこで、もしいつか何も運動しないというようなことがありうるとすれば、これは二つの仕方でおこるのでなければならない。その一つは、アナクサゴラスが言うような仕方であつて、かれは、すべてのものは一緒であつたし、無限の時間にわたつて静止していたが、**理性がそれらのあいだに運動をひきおこしてそれらを分離した**、と主張している。もう一つは、エムペドクレスの言うような仕方であつて、かれによれば、事物は運動と静止とを交互にくりかえす、それらが運動するのは、愛が多から一をつくるとき、あるいは憎みが一から多をつくるときであり、それらが静止するのは、これら〔二つのとき〕の中間の時間においてなのである。『自然学』出隆・岩崎允胤訳、1968、pp.293-94。

79) cf. Aristoteles, *Metaphysica*, IV, c.6, 1011a18-30: **εἰ δὲ μὴ ἔστι πάντα πρὸς τι, ἀλλ' ἐνιά ἐστι καὶ αὐτὰ καθ' αὐτά**, οὐκ ἂν εἶη πᾶν τὸ φαινόμενον ἀληθές: τὸ γὰρ φαινόμενον τινὶ ἐστι φαινόμενον: ὥστε ὁ λέγων ἅπαντα τὰ φαινόμενα εἶναι ἀληθῆ ἅπαντα ποιεῖ τὰ ὄντα πρὸς τι. διὸ καὶ φυλακτέον τοῖς τὴν βίαν ἐν τῷ λόγῳ ζητοῦσιν, ἅμα δὲ καὶ ὑπέχειν λόγον ἀξιοῦσιν, ὅτι οὐ τὸ φαινόμενον ἔστιν ἀλλὰ τὸ φαινόμενον ᾧ φαίνεται καὶ ὅτε φαίνεται καὶ ἧ καὶ ὡς. **ἂν δ' ὑπέχωσι μὲν λόγον, μὴ οὕτω δ' ὑπέχωσι, συμβήσεται αὐτοῖς τάναντία ταχὺ λέγειν**. ἐνδέχεται γὰρ τὸ αὐτὸ κατὰ μὲν τὴν ὄψιν μέλι φαίνεσθαι τῇ δὲ γεύσει μή, καὶ τῶν ὀφθαλμῶν δυοῖν ὄντων μὴ ταῦτα ἑκατέρω τῇ ὄψει, ἂν ὤσιν ἀνόμοιοι: 「もし必ずしもすべてが相対的に存在するのではなくて、或るものはそれ自体において存在しもするのだとすれば、現われのすべてが真実であるのではないであろう。なぜなら、現われは誰かに対する〔相対的の〕現われであるから。したがって、すべての現われがことごとく真実であると説く者は、すべての存在を相対的であるとする者である。それゆえに、議論上の強制力を要求すると同時に自らの説の正当性を主張するかれらは、現われがただ〔端的に〕存在するということではなくて、現われはそれが現われる人に対してそうあり、それが現われる時にそうあり、またその現れる感官やその時の事情のいかに応じてそうあるのである、と言って自ら警戒せねばならない。もしかれらがこのように自ら警戒することなしに自説の正当性を要求するならば、かれらは直ちに自ら矛盾したことを言うことになるだろう。なぜなら、同じものでも、視覚には蜜として現われるが、味覚にはそうは現われず、また眼球が二つあるので、それぞれの視力が同等でない場合には、同じものと見えないこともありうるからである」

80) Aristoteles, *Metaphysica*, IV, c.5, 1009b36-1010a1: οὔτοι τοιαύτας ἔχουσι τὰς δόξας καὶ ταῦτα ἀποφαινόνται περὶ τῆς ἀληθείας, πῶς οὐκ ἄξιον ἀθυμῆσαι τοὺς φιλοσοφεῖν ἐγχειροῦντας; **τὸ γὰρ τὰ πετόμενα διώκειν τὸ ζητεῖν ἂν εἶη τὴν ἀλήθειαν**. 「この人々が、真理に関してこのような意見をいっていており且つこれを表明しているとなると、これから知恵の愛求〔哲学〕を始めようとする者どもの気をくじかないではおかないからである、というのは、もしそうだとすれば、真理を探究することは飛ぶ鳥を追かけるようなものであろうから」。『形而上学』出隆訳、1968、p.118。

81) Aristoteles, *De anima*, II, c.2, 424a1: **τὸ γὰρ αἰσθάνεσθαι πάσχειν τι ἐστίν**: ὥστε τὸ ποιοῦν, οἷον αὐτὸ ἐνεργεῖα, τοιοῦτον ἐκεῖνο ποιεῖ, δυνάμει ὄν. 「感覚するとは何らかの作用を受けることだからであり、したがってその作用するものは感覚器官を自己自身が現実活動態においてあるのと同じような性格のものにするのであるが、それは感覚器官が可能態においてそのような性格のものだからである」。

『魂について』中畑正志訳、2001、p.118。

82) Aristoteles, *Metaphysica*, IV, c.5, 1010a2-3. →註 66 参照

83) Aristoteles, *Metaphysica*, I, c.5, 985b24-986b29: ἐν δὲ τούτοις καὶ πρὸ τούτων οἱ καλούμενοι **Πυθαγόρειοι** τῶν μαθημάτων ἀνάμεινοι πρῶτοι ταῦτα τε προήγαγον, καὶ [25] ἐντραφέντες ἐν αὐτοῖς **τὰς τούτων ἀρχὰς τῶν ὄντων ἀρχὰς φήθησαν εἶναι πάντων**. ἐπεὶ δὲ τούτων οἱ ἀριθμοὶ φύσει πρῶτοι, ἐν δὲ τούτοις ἐδόκουν θεωρεῖν ὁμοιώματα πολλὰ τοῖς οὔσι καὶ γιγνομένοις, μᾶλλον ἢ ἐν πυρὶ καὶ γῆ καὶ ὕδατι, 「さて、(1) この人々と同じところに、あるいはかれらより以前に、あのいわゆる『ピュタゴラスの徒』は、数学的諸学課の研究に着手した最初の人々であるが、かれらは、この研究をさらに進めるとともに、数学のなかで育った人々なので、この**数学の原理をさらにあらゆる存在の原理である**と考えた。けだし、数学の諸原理のうちでは、その自然において第一のものは数であり、そしてかれらは、こうした数のうちに、あの火や土や水などよりもいっそう多く存在するものや生成するものどもと類似した点のあるのが認められる、と思った」。『形而上学』出隆訳、1968、pp.21-22。

84) Aristoteles, *Metaphysica*, I, c.6, 987b5-19: **ἀδύνατον γὰρ εἶναι τὸν κοινὸν ὄρον τῶν αἰσθητῶν τινός, ἀεὶ γε μεταβαλλόντων**. οὗτος οὖν τὰ μὲν τοιαῦτα τῶν ὄντων **ιδέας προσηγόρευσε**, τὰ δ' αἰσθητὰ παρὰ ταῦτα καὶ κατὰ ταῦτα λέγεσθαι πάντα: **κατὰ μέθεξιν γὰρ εἶναι τὰ πολλὰ ὁμώνυμα τοῖς εἶδεσιν**. ...ἐπι δὲ **παρὰ τὰ αἰσθητὰ καὶ τὰ εἶδη τὰ μαθηματικὰ τῶν πραγμάτων εἶναι** φησι **μεταξύ**, διαφέροντα τῶν μὲν αἰσθητῶν τῶν αἰδία καὶ ἀκίνητα εἶναι, τῶν δ' εἰδῶν τῶν τὰ μὲν πόλλ' ἅπτα ὅμοια εἶναι τὸ δὲ εἶδος αὐτὸ ἐν ἕκαστον μόνον. ... 「その理由というのは、**感覚的事物は絶えず転化している**ので、**共通普遍の定義はどのような感覚的事物についても不可能である**というにあった。そこでプラトンは、あの**別種の存在をイデアと呼び**、そして、各々の感覚的事物はそれぞれその名前のイデアに従いそのイデアとの関係においてそう名づけられるのであると言った。けだし、或るイデアと同じ名前をもつ多くの**感覚的事物は、そのイデアに与かること**によって、**そのように存在する**というのであるから。…だがプラトンは、さらに**感覚的事物とエイドスとのほかに、これら両者の中間に、数学の対象たる事物が存在する**と主張し、そしてこの**数学的諸対象**をば、一方、それらが永遠であり不変不動である点では**感覚的事物**と異なり、他方、エイドスとは、**数学的諸対象には多くの同類のもの**があるのにエイドスはいずれもそれぞれそれ自らは**唯一単独である**という点で異なるとしている。『形而上学』出隆訳、1968、pp.27-28。

85) Thomas Aquinas, *Summa Theologiae*, I, q.84, a.5, c.: Et ideo Augustinus, qui doctrinis Platoniorum imbutus fuerat, si qua invenit fidei accommoda in eorum dictis, assumpsit; quae vero invenit fidei nostrae adverse, in melius commutavit. 「それゆえ、アウグスティヌスは、プラトン派の説に浸って、彼らの言葉のなかに信仰と合致するものを見出すとそれを取り入れ、他方、我々の信仰に反すると分かったものは良いように変えた」。

86) cf. Aristoteles, *Metaphysica*, I, c.9, 991a20-23: τὸ δὲ λέγειν παραδείγματα αὐτὰ εἶναι καὶ μετέχειν αὐτῶν τᾶλλα κενολογεῖν ἐστὶ καὶ μεταφορὰς λέγειν ποιητικὰς. **τί γὰρ ἐστὶ τὸ ἐργαζόμενον πρὸς τὰς ιδέας ἀποβλέπον;** 「エイドスは原型であり他の事物はこれに与かると語られているが、こう語ることは空語することであり、詩的比喩を語ることに他ならない。というのは、たとえば**イデアをながめつつ作りだす者**というのはなに者なのか?」。『形而上学』出隆訳、1968、p.42。

87) Augustinus, *De civitate Dei*, VIII, c.4. CCSL 48, p.220, 33-56: **Quid autem in his** uel de his singulis partibus **Plato senserit, id est, ubi finem omnium actionum, ubi causam omnium naturarum, ubi lumen omnium rationum esse cognouerit uel crediderit**, disserendo explicare et longum esse arbitror et **temere affirmandum esse non arbitror**. Cum enim magistri sui Socratis, quem facit

in suis uoluminibus disputantem, notissimum morem dissimulandae scientiae uel opinionis suae seruare adfectat, quia et illi ipse mos placuit, factum est ut etiam ipsius Platonis de rebus magnis sententiae non facile perspicere possint. Ex his tamen, quae apud eum leguntur, siue quae dixit, siue quae ab aliis dicta esse narrauit atque conscripsit, quae sibi placita uiderentur, quaedam commemorari et operi huic inseri oportet a nobis, uel ubi suffragatur religioni uerae, quam fides nostra suscepit ac defendit, uel ubi ei uidetur esse contrarius, quantum ad istam de uno Deo et pluribus pertinet quaestionem, propter uitam, quae post mortem futura est, ueraciter beatam. **Fortassis enim qui Platonem ceteris philosophis gentium longe recteque praelatum acutius atque ueracius intellexisse ac secuti esse fama celebriore laudantur, aliquid tale de Deo sentiunt, ut in illo inueniatur et causa subsistendi et ratio intellegendi et ordo uiuendi;** quorum trium unum ad naturalem, alterum ad rationalem, tertium ad moralem partem intellegitur pertinere. 「しかしそのおのおのの部門によって、ないしそのおのおのの部門の内部でプラトンがどんなことを考えていたか、すなわち、すべての行為の目的がどこにあり、すべての自然の原因がどこにあり、すべての理性の光がどこにあると認めかつ信じていたか、そうしたことを論述するには長い時間を必要とすると思われる。また軽々に断言すべきではないと思われる。なぜなら、プラトンは、彼の書物の中で〔主要な〕対話者とした師ソクラテスのあまりに有名な方法、すなわち、自分の持っている知識と見解とを隠す方法を維持することを熱望していたので、またプラトン自身がその方法を気に入っていたということもあって、多くの〔主要な〕事柄についてのプラトンの見解を〔そこから〕容易に取り出すことができないという事態がおきてくるからである。しかしながら、プラトン自身が言ったことであろうと、他の人々から告げられたことだとプラトン自身が述べまた書いていることであろうと、彼の書物の中で語られ、彼自身も気に入っていると思われる見解の中から、わたしたちの信仰が支持し擁護する真の宗教に対してプラトンが好意を示していると思われる点、また反対していると思われる点を——死後に存すべき真の至福の生のために、唯一神が存在するのか多数の神々が存在するのかという議論に関する限り——わたしたちはこの書物の中で言及し書きとどめるべきである。おそらく、プラトンを異教の他のどんな哲学者たちよりもまさしく格段とすぐれた哲学者であると、明敏にかつ真実に理解していると賞讃され、プラトんに追従していると広い名声を博して賞讃されている人々（プラトン派の人々）は、神について次のようなことを知っているであろう。すなわち、彼らは神の中に存在の原因、知性認識の根拠、生活の秩序が見出されること、そして、これら三つのうち、最初のもの（存在の原因）は自然学の部門に属し、次のもの（知性認識の根拠）は論理学の部門に属し、第三のもの（生活の秩序）は道徳学の部門に属することを知っているであろう」。『神の国』 茂泉昭男・野町啓訳 1982, p.169-170。ヘンリクスの引用箇所は太字にした。なお、ヘンリクスのテキストでは、qui Platonem ceteris → qui prae ceteris Platonem, fama celebriore laudantur → fama celebriore laudantとなっている。

- 88) Augustinus, *De Trinitate*, XII, c.14, n.23. CCSL 50, pp.376, 54-377, 68: Non autem solum rerum sensibilibus in locis positarum sine spatiis localibus manent intellegibiles incorporalesque rationes, uerum etiam motionum in temporibus transeuntium sine temporali transitu stant etiam ipsae utique intellegibiles, non sensibiles. Ad quas mentis acie pervenire paucorum est, et cum pervenitur quantum fieri potest, non in eis manet ipse perventor, (sed ueluti acies ipsa reverberata repellitur) et fit rei non transitoriae transitoria cogitatio. Quae tamen cogitatio transiens per disciplinas quibus eruditur animus memoriae commendatur ut sit quo redire possit quae cogitur inde transire, quamvis si ad memoriam cogitatio non rediret atque ibi quod commendauerat inueniret, uelut rudis ad hoc

sicut ducta fuerat duceretur, idque inueniret ubi primum inuenerat, in illa incorporea ueritate unde rursus quasi descriptum in memoria figeretur. 「場所を占める感覚的な事物の知性的で非物体的な根拠は、場所を占めることなしに存在し、同じく時間を通して過ぎ行く運動の知性的で非感性的な根拠もまた、時間の中で測られることなしに存在する。精神の目をもってこれらのものに達する人はほんの少数である。人々はなしうる限り達しようと努めるが、達してもそこにとどまらず、〈精神の目はいわば撃退され、はね返されてしまい、〉こうして移り行かないものの移り行く思考だけが残るのである。しかし、この移り行く思考は、精神を訓練する学知によって記憶に委託される。したがって、このように引き離された思考が戻ることのできる場所があるというわけである。もし思考が記憶に戻らず、記憶に委託されたものを見出すこともないとすれば、修練士のように最初に導かれた所に帰り、最初に見出した所で、すなわち非物体的な真理の中にそれを見出すであろう。そしてそれはまた、いわば書き写されたものとして記憶の中に固定されることになる。』『三位一体』泉治典訳、2004、p.352。ヘンリクスの引用には、autem, utique, 〈 〉の部分はなく、sensibiles → sensibiles rationes、et → At、quo → qua、fuerat → fuit となっている。和訳でも同様に 〈 〉で括った。

89) cf. Aristoteles, *Analytica Posteriora*, I, c.1, 71a17-b8: Ἔστι δὲ **γνωρίζειν τὰ μὲν πρότερον γνωρίσαντα, τῶν δὲ καὶ ἅμα λαμβάνοντα τὴν γνώσιν**, οἷον ὅσα τυγχάνει ὄντα ὑπὸ τὸ καθόλου οὐ ἔχει τὴν γνώσιν. 「また、事物を認識するにあたって、或るものについてはひととは予めこれを認識しておかなければならないが、或るものについては、その認識は当の事物を認識すると同時にである。すなわち、既知の全体的なものにちょうど下属する限りのもの〔個別〕の認識が後者の場合である」。『分析論後書』加藤信朗訳、1971、p.614。

90) Augustinus, *De Trinitate*, IX, c.3, n.3. CCSL 50, p.296, 13-18: 〈Sed quoquo modo se habeat uis〉 qua per oculos cernimus, ipsam certe uim, siue sint radii siue aliud aliquid, oculis cernere non ualemus; sed mente quaerimus, et si fieri potest etiam hoc mente comprehendimus. Mens ergo ipsa sicut corporearum rerum notitias per sensus corporis colligit sic incorporearum per semetipsam. 「しかし光線であれ他の何かであれ、〈私たちがどんな力によって見るとしても、〉その力そのものを目で見るとはたしかにできない。けれども、私たちは精神でもって尋ねるのであり、なしうるならばこのことをも精神によってとらえるのである。こうして、精神自身が身体感覚によって物体の観念を、また精神自身によって非物体の観念を集めるのである。』『三位一体』泉治典訳、2004、pp.261-262。ヘンリクスの引用には 〈 〉の部分と certe はなく、semetipsam → se ipsam となっている。和訳でも同様に 〈 〉で括った。

91) Thomas Aquinas, *De Veritate*, q.1, a.12, c.: Responsio. Dicendum, quod nomen intellectus sumitur ex hoc quod intima rei cognoscit; **est enim intelligere quasi intus legere**: sensus enim et imaginatio sola accidentia exteriora cognoscunt; solus autem intellectus ad interiora et essentiam rei pertingit. 「答えて、言わなければならない。intellectus (知性) という語はものの内面を認識することから由来する。じっさい、**知性認識するとは、いわば内面を読むことである**。というのも、感覚と想像力は、外面的附帯性しか認識しない。知性のみがものの内面と本質に到達する」。テキストは CORPUS THOMISTICUM に よ る。Sancti Thomae de Aquino, *Quaestiones disputatae de veritate*, Textum Taurini 1953 editum denique 1970-1972 Leonino collatum ac translatum a Roberto Busa SJ in taenias magneticas denuo recognouit Enrique Alarcón atque instruxit.